

## ■ 総合アレルギー専門医が行うべき検査 ■

The examination that total allergist should perform

庄司 俊輔

独立行政法人国立病院機構東京病院副院長

### はじめに

新しい専門医制度において、日本アレルギー学会は基盤学会の次の段階に位置するサブスペシャルティー学会に位置づけられている。この「二段階制度」は一見するとこれまでと何の変わりがないようにみえるが、実際には、これまでのように「アレルギー専門医(内科)」あるいは「アレルギー専門医(皮膚科)」などの診療科による区分がなくなる(より正確に言えば新しい専門医機構での診療科別の認可が困難)と予想されている。すなわち、これまでもアレルギー専門医の満たすべき条件とされていた、total allergistとしての診療技術が必須条件として資格化されることになるわけである。

本稿では、新アレルギー専門医の資格を取得する際に、最低限知識として習得しておくべき項目を概説し、特に重要で図示化できるものを示した。アレルギー専門医が、これらの検査を実際の臨床の場で自ら行うかどうかは、診療を行う状況によると思われるが、これまでのように基盤診療科での疾患以外は座学による知識のみでよしとすることは許されなくなると思われる。今後は日本アレルギー学会主催の総合アレルギー講習会での実技講習などをはじめとする、種々の実習の機会に自

ら積極的に参加して検査手技を習得することが必須となると考えられる。

### I. 各診療科に共通した必須の検査

新専門医制度において、アレルギー専門医が「総合アレルギー専門医」という名称になるかはともかく、アレルギー専門医が関与する検査において、「アレルギー」の要素が重要であることは間違いない。「アレルギー」はもちろん各診療科にわたる広範な診療領域も示すが、一方でCoombs&Gell分類I型アレルギーに属する抗原-抗体反応に関する検査は、アレルギー専門医が習得すべき検査のなかで基本中の基本というべき検査である。これには、血清での抗原非特異的免疫グロブリン(immunoglobulin ; Ig)E抗体検査および抗原特異的IgE抗体検査と、皮膚反応を用いてIgE抗体を検出する皮膚テストがある。直接生体に侵襲を加えずにすむ利点をもつ試験管内反応として、リンパ球刺激試験やヒスタミン遊離試験も補助的に用いられる。

#### 1. 非特異的IgE抗体, 特異的IgE抗体

血清での非特異的IgE抗体検査は、血清総IgE抗体検査ともいわれ、文字どおり血清中に存在するIgE抗体の総量を測定する。個別の抗原の特定